

事例 No.6 外国人児童生徒等リーダー研修

浜松市教育委員会

| | |
|--------|---|
| 主たる対象者 | 外国人児童生徒等教育担当教員 10名 |
| 目標 | 外国人児童生徒等教育のリーダーとして、浜松市内の課題を共有し、日本語能力を含めた実態把握の考え方・方法と教科学習に参加するための力を育む授業づくりについて学び、組織的に教育・支援の充実を図るよう、意欲的に取り組むことができる。 |
| 研修内容 | 外国人児童生徒等の理解と日本語指導の充実 1回目：JSLカリキュラムの授業づくり ★⑤⑩⑰⑱ 2回目：外国人児童生徒の指導と発達支援教育 ★⑩⑬ 3回目：DLAの実施方法と活用 ★⑲⑳㉑ |
| 形態・方法 | 講義・活動型（話し合い・事例報告・疑似体験） |
| 時間 | 180分×3回 |

★本事業報告書（2017）「養成・研修内容構成」（pp.72-76）の項目

1. 現状と課題

浜松市の公立小中学校には、外国人児童生徒等は小学校に1186人、中学校に541人、計1727人在籍している。（平成30年5月1日現在）。出身国別の割合は、ブラジルが48.6%、フィリピンが17.0%、ペルーが11.2%、ベトナムが9.4%、中国が6.5%、インドネシアが3.0%、その他4.2%である。この内、日本語指導が必要な児童生徒数は1,085人で、外国籍児童生徒全体の62.8%である。加えて、日本国籍で日本語指導が必要な児童生徒が177人いる。

市の、受け入れ・指導体制は、外国人児童生徒指導のための「加配教員」として、37人（小学校29人、中学校8人）が配置され、「特別の教育課程」に基づく指導を行っている。児童生徒の母語ができる「就学支援員」が14人（ポルトガル語話者13人、タガログ語話者1人）が、1日6時間、週5日間、学校に常駐して学習支援・通訳・翻訳等を行っている。また、1日4時間、各学校を訪問して学習支援や通訳・翻訳等の支援を行う「就学サポーター」が22人（ポルトガル語9人、スペイン語4人、タガログ語5人、英語1人、ベトナム語1人、インドネシア語1人、中国語1人）を置いている。その他に、来日直後の児童生徒への日本語指導を行う「初期適応サポーター」を11人（ポルトガル語4人、タガログ語3人、中国語1人、ベトナム語1人、インドネシア語1人、スペイン語1人）派遣している。

外国人児童生徒等教育担当教員の教育力の課題として、第一に短期間で担当が代わるため、指導内容・方法、教育支援のコーディネートに関する理解が十分ではない教員が少なくない点が挙げられる。また、経験があっても、支援が必要な児童生徒数が多く、それぞれに対する適切な支援が何かの判断に困っているケースも多い。一方、担当者以外の一般教員には、担当者任せにしたり、日本語習得が一定程度進んでいるにも関わらず通訳なしには指導できないと思いついていたりして、本来行うべき支援を積極的に行っていない場合がある。また、外国人児童生徒等指導を日本語文型の指導だと誤解し、教科他の学習の支援がおろそかになる場合がある。

2. カリキュラム（研修実施計画）

本研修は、浜松市の外国人児童生徒等の指導のリーダーを養成することを目的として実施したものである。研修全体を通して、リーダーとして、校内コーディネートの仕方や指導の在り方、日本語能力を把握し指導に生かす方法等の専門性を高めることを目指している。7回の連続講座であるが、そのうちの3回で、モデルプログラムの検証を行った。

☆参照した主なモデルプログラム No. (2017年度報告書 pp. 207-244)

| | | | | |
|---|---|----|-----|------|
| 日時 場所 | 1回目 5月23日(水) 13:30~16:30 180分 於:浜松市教育センター 2回目 6月20日(水) 13:30~16:30 180分 於:浜松市教育センター 3回目 9月12日(水) 13:30~16:30 180分 於:浜松市教育センター | | | |
| 実施団体・機関 | 浜松市教育委員会 | | | |
| 研修・授業名 | 外国人児童生徒指導リーダー研修①②⑤ | | | |
| 研修テーマ | 第1回: JSLカリキュラムの授業づくりー教科と日本語の統合学習 第2回: 外国人児童生徒等のキャリア支援、心身の発達と学習の過程 第3回: 言語能力測定ツール「DLA」の実施方法と活用の仕方 | | | |
| 講師等 | 第1回: 太田正之(和地小学校教諭)、齋藤ひろみ(東京学芸大学教授) 第2回: 土谷レオナルド(浜松市危機管理課職員)、清長豊(NPO法人アジャスト理事長) 第3回: 大谷喜久代(豊橋市立飯村小学校教諭) | | | |
| 受講者 | 外国人児童生徒等教育 リーダー候補者10人 (全3回に参加) 第1回目: 計45人 外国人児童生徒担当者35人 第2回目: 計33人 外国人児童生徒等担当教員、教科指導員23人 第3回目: 計11人 外国人児童生徒担当教員1人 | | | |
| 第1回 外国人児童生徒指導リーダー研修① | | | | |
| 到達目標: 浜松市内の外国人児童生徒等に対する教育の課題を共有し、日本指導のコース設計の方法や教科と日本語の統合学習(JSLカリキュラム)の考え方を理解し、学校内で組織的に教育・支援を行おうという意欲を高める。 | | | | |
| 活動展開 (分) | ★ | 形態 | 留意点 | 参考資料 |

| | | | |
|--|---|--------------------------------|---|
| 活動1 事例紹介 受け入れの体制と日本語指導の方法 (30分) 報告者：太田正之 (和地小学校) | | | |
| 事例紹介：浜松市立和地小学校 「つかむ・つなぐ・関わる」 1 実態の把握と指導対象児童の決定 (10) 2 日本語指導の内容と方法 (10) 3 学校内での体制づくり・連携の仕方 (10) | ⑬ ⑭ ⑮ | 講義 | <ul style="list-style-type: none"> ・コース設計 (日本語プログラムの組み合わせ)・DLAの活用 ・在籍学級の学習と関連付け ・指導計画の共有 |
| 活動2 JSLカリキュラムに関する講義 (120分) 講師：齋藤ひろみ (東京学芸大学) | | | |
| 導入： 0 アイスブレイキング (自己紹介) (10) 1 子ども作文から、言語習得の課題を把握する (10) 展開： 2 日本語指導を通じて育成する力 (30) 3 「JSLカリキュラム」教科と日本語の統合学習の考え方 (20) 4 JSLカリキュラムの事例 (30) 5 JSLカリキュラムの授業づくり (10) ・授業展開 ・活動単位と日本語の表現 まとめ： 6 JSLカリにける5つの支援の重要性 (10) | ⑩ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ | 話し合い 講義 講義 話し合い 講義 | <ul style="list-style-type: none"> ・日本語を使わずに自己紹介 ・文化間移動と学びの分節化／連続性の保障を強調 ・語彙調査結果から実態把握の重要性を理解。 ・生活、学習、自己実現のための日本語 ・生活言語能力と学習言語能力の理解を促す。 ・3事例の支援の工夫を確認する 小学1年生 算数科「12-3 (減減法)」 小学5年 算数科「平均」 小学5年 社会科「気候」 |
| 第2回 外国人児童生徒指導リーダー研修② | | | |
| 到達目標 | 日本で暮らしてきた外国人青年の語りを聞き、ライフコースの視点の必要性を理解するとともに、発達障害教育の専門家の話から、外国人の子どもへの発達上の課題の捉え方と指導・支援の仕方を見直し、子供たちの社会性の形成 | | |

| やキャリア教育に意欲的に取り組もうとする。 | | | | |
|---|---|------|---|-----------|
| 活動展開 (分) | ★ | 形態 | 留意点 | 参考資料 |
| 活動1 外国人児童生徒等の生き方について (30分) 発表者：土谷レオナルド (浜松市危機管理課職員) | | | | |
| 1 当事者の語り (事例) 自身の生き方について | ⑬ | 講話 | ・自身の体験の話 ・現在の仕事について | |
| 活動2 外国人児童生徒等の指導と発達支援教育 (140分：休憩10分を含む) 講師：清長 豊 (NPO法人アジャスト) | | | | |
| 導入： 1 自分が担当している子供の 実態について話し合う (30) ・子供の表れについて ・教師の困り感について 等 2 話し合った内容についての 発表する (3校程度) (10) | ⑩ | 話し合い | ・実態はどんな状況でどう表れているか (いつ、どこで、何をするとどうなるのか)。 ・心配の方向 (どうなりそうか) ・指導で困っていること | |
| 展開 3 講話「外国人児童生徒等の指導と発達支援教育」を聞く (50) 4 2で発表のあった事例について講師のコメント・アドバイスを受けて、子供の理解を深める (20) 5 講話の内容について質疑応答を行う (10) まとめ 6 外国人児童の指導と発達支援との関係を整理する (10) | ⑩ | 講義 | ・発達障害と特別支援教育の基本的な考え方・実際 ・言語の指導と発達障害 ・個別の事例にそれぞれについて検討する。言動をどう捉え、どのように支援するか。 ・講師によるコメントを踏まえ、今後の支援の仕方について再度検討する。 | 講師が準備した資料 |
| 第3回外国人児童生徒等リーダー研修会⑤ | | | | |
| 到達目標：DLAの考え方や実施方法を理解し、その結果をどのように指導に生かしたらよいかを理解できる。(180分 休憩10分を含む) | | | | |
| 活動展開 (分) | ★ | 形態 | 留意点 | 参考資料 |
| 1 市教育委員会から研修の趣旨の確認 (5) | | | ・リーダーとしての役割について確認する。 | |
| 活動1 DLAの考え方と実施方法 | | | | |
| 導入： 1 DLA測定ツールの実施状況や | ⑰ | 話し | ・参加者自身の実施経験を具体的に話し合う。経験がない場合 | |

| | | | | |
|--|--------|----------------------|--|---|
| <p>子供の様子について話し合う。 (10)</p> <p>展開： 2 DLA 測定ツールの考え方、実施方法について確認する (45)</p> <p>① DLAの考え方について知る。 ②実施方法を確認する。</p> | ⑱ | 合 い 講 義 | <p>は、DLA 導入の不安や困難について話し合う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「どんな力」を把握するためのツールなのかを理解し、生活言語能力と学習言語能力を意識する。 ・実施のステップや留意点を確認する。 | <p>文部科学省 「外国人児童生徒のためのJSL対話型アセスメント」</p> |
| <p>活動2 DLA の活用方法の事例から学ぶ 講師 大谷喜久代（豊橋市立飯村小学校）</p> | | | | |
| <p>3 講師より事例紹介を聞き、DLA の結果の活用の可能性を知る (50)</p> <p>4 DLA の結果を活かす授業を検討する。(35)</p> <p>①DLA の結果(事例)を基に、学習指導計画(授業案)を考える ②授業案を紹介し合い、結果の生かし方について検討する</p> <p>まとめ(振り返り)： 5 講師のまとめを聞いて、活用方法について再度見直す。(25)</p> | ⑱ ⑳ | 講 義 演 習 | <ul style="list-style-type: none"> ・DLA の結果と日本語指導、教科指導との関連付け方を、事例から理解する。 ・DLA の結果を、授業の内容や活動、支援方法に反映させるか具体的に検討する。 ・個人作業後に共有する。 | <p>講師が準備した事例に関する資料</p> <p>授業案作成のためのワークシート</p> |

3. 実施者による振り返り

リーダー研修であったため指導経験をもつ教員が多く、研修前には校内の支援体制を整え運営を円滑にするために、有益な情報を得ることを期待していた。また、JSL カリキュラムやDLA については、一定の情報や経験があり、自身の現場での実施上の問題を解決し、具体的な活用方法やそれらを生かした授業づくりについて学びたいという意見が多く見られた。その他、児童生徒の学習面の困難を、発達障害教育との関係を含めて捉えた上で、支援方法を見極めることや、児童及び保護者が自立して生活を営めるように意識した教育について学びたいという希望もあった。

研修後には、講師による具体的な事例や授業での工夫などが、今後、授業を組み立てるうえで有効であったという意見や、子どもの困難がどのように表れるかを具体例で知ることができ、一人ひとりに合った支援を行うことの重要性を改めて確認したという声があった。また、形態としては、ワークショップなどの活動の満足度が高かった。講義のみならず、グ

ループで、協議をして意見交換をしたことや、活用方法に関する演習などを行ったことにより、理解が深まったようであった。研修で学んだことを、自身の授業へどのように生かすかを知りたいと考える教員が多く、研修後、授業や指導において、研修で得たヒントをもとに工夫を凝らしている教員も少なくない。

次年度も、浜松市の外国人児童生徒等教育の中核を担う人材の育成を重視して研修を実施したいと考えている。リーダー研修修了者には、本研修会で実践発表を行うなど、取り組みを共有してもらい、指導的な立場でネットワーク化と充実化に力を発揮してもらいたいと考えている。

モデルプログラムについては、研修を企画・運営するに当たり、どのような資質を身に付けたらよいのか、どのような流れで研修を組み立てたらよいのかということが分かり、参考になった。また、の課題に応じてカリキュラムが作れるため、研修内容・目的を明確にでき、受講者に伝えやすくなったと思う。また、講師を紹介していただいたことで、研修の幅が広がった。また、講義・活動型・フィールド型といったバリエーションがあり、いろいろな形で試してみたいと考えている。母語支援員等への研修でも活用できそうである。講師へ依頼する際にもカリキュラムに基づいて話をすることができるので、運営については考えを共有しやすくなったと考えている。

現場

4. 資料

(1) 使用/参照した資料一覧

1) 文部科学省 web ページ「CLARINET へようこそ」

「外国人児童生徒受け入れの手引き」

http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/002/1304668.htm, 「DLA」

「学校教育における JSL カリキュラムの開発について」

小学校編 http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/003/001/008.htm

中学校編 http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/003/001/011.htm

「外国人児童生徒のための JSL 対話型アセスメント」

http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/003/1345413.htm

2) 齋藤ひろみ・今澤悌・内田紀子・花島健司 (2011) 『外国人児童生徒のための支援ガイドブック—子どもたちのライフコースによりそって』 凡人社

3) 四日市市立笹川東小学校 平成 29 年度 JSL カリキュラムに基づく授業実践事例 板橋区立第八小学校 平成 28 年度 JSL カリキュラムに基づく授業実践事例

5) 講師作成資料 (本事業 web サイトで公開予定) 第 1 回研修資料を本事例集に掲載 第 1 回研修「つかむ・つなぐ・関わる」浜松市立和知小学校 大田正之

「JSL カリキュラムの授業づくり」東京学芸大学 齋藤ひろみ

第 2 回研修「多様な子どもたちの支援」NPO 法人アジャスト清長豊

第 3 回研修「DLA の考え方と実施方法」浜松市教育委員会学校教育部 高島美保